

# 風土



青  
菽  
神  
蔵  
器

くわんおんや山藤なだれ滝をなす

大声で叫ぶ埴輪や南風吹く

燕来る木臼作りの足鉋

青菽のすでにそよげる高さかな

はばたきて一尺は天羽抜鶏

日の入りてよりの夕焼利休の忌  
みひらけるものに大山蓮華咲く

吉川英治記念館 四句

道入の黒楽茶碗雲の峰

五月かな鴨居に梅花釘かくし

扁額は頼山陽や山法師

万緑のあふる英治の眼鏡かな

梅干の天麩羅も出て傘雨の忌



# 竹間集

同人作品



老鶯

岩木茂

老鶯の 一声澄める 骨納め  
身の内にははの部屋あり明易し  
張つてゐるふたつの乳房聖五月  
水馬の流れれ込みたる水田かな  
新緑や縁側で飲むハーブテイー  
吊橋の架かりてゐたり雲の峰  
淵に水落ちて碧める我鬼忌かな

夏来る

相沢有理子

うらうらと歩いて五分和菓子買ふ  
芝桜丘 一帯に敷きつめぬ  
のどけて菓子工房に刻過ぐす  
一人乗りぶらんこが好き夕茜  
卓囲む幸しみじみとこどもの日  
起き抜けのシャワー温めに夏来る  
筒鳥のこだま返しに空の青

囀り

中谷葉留

新しき句帳を持ちて青き踏む  
合流の大利根となる夕朧  
見透しに枝垂桜の薬医門  
囀りや三步で渡る石の橋  
おだやかに清明の日の昏れにけり  
春昼の沈むさがき牛蒡かな  
亀鳴いて一つが池に落ちにけり

黄水仙

小林輝子

走り鯨焼く山の端をくゆらせて  
あの人もこの人も亡し露の臺  
投票口汚れきつたる雪残る  
厘揉の分銅に乗る春埃  
日も風も集る廃屋の黄水仙  
世に古りてとことは黒き甘茶仏  
鳥影の右へ左へ花七分

五月来ぬ

小野寺節子

囀りの小字を隠す街となる  
ほろ酔うて花を笑はず時事放談  
春行くや出雲風土記の頁繰る  
八十五齡吾れと同年春惜しむ  
朝戸出の一人の時間五月来ぬ  
昼風呂に何考へる麦の秋  
天地の五月待ちぬる吾れも人

藤落花

小林清之介

大揺れの風の藤棚下にゐる  
一陣の風に駆け次ぐ藤落花  
吾が影のダブリて繁き藤落花  
犇きて蕊まで白き白つつじ  
米撒いて雀呼ぶ日の春寒き  
逆光の雀一羽を見て薄暑  
入れ歯で噛むだけのご堅し昭和の日

花の筏

田村すゝむ

堰越して花の筏を組み直す  
飛び石の先の庵や百千鳥  
介山の峠遙かに大霞  
蜷動く研究室の水槽に  
麦秋やルオーのキリスト受難の絵  
春惜しむ生れしばかりの陶の影  
風光る橋の袂の種物屋

梅雨の蔵町——栃木にて

— 田村すゝむ —

蔵町の空を四角に夏燕  
梅雨晴れや蔵の造りの写真館  
豪商の館や梅雨の巴<sup>う</sup>波<sup>ま</sup>川  
梅雨寒や姿見ひとつ蔵座敷  
風光る水を鏡の並び蔵  
黒南風や回漕問屋の舟板塀  
木の椅子に免れて梅雨の民具館  
見世蔵や麻<sup>あ</sup>苧<sup>お</sup>問屋の柿の花  
両袖に石の蔵置く杜若  
三連の「おたすけ蔵」や濃紫陽花

著 莪 咲 く や 県 庁 堀 を 桝 形 に  
枇 杷 熟 る る 陣 屋 代 官 屋 敷 跡  
青 梅 雨 や 蔵 に 二 つ の 通 気 孔  
壁 に 掛 く 祝 ひ 風 呂 敷 南 風 吹 く  
梅 雨 蔵 の 敷 居 に ね ず み 返 し かな  
花 菖 蒲 瓦 斯 灯 残 る 麻 間 屋  
紫 陽 花 に 雨 の 集 ま る 巴 波 川  
梅 雨 晴 れ や 路 傍 に 有 三 文 学 碑  
有 三 館 の 箱 階 段 や 梅 雨 湿 り  
辞 世 の 句 の 「 死 ん で た ま る か 」 梅 雨 深 し

山本有三記念館

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

皇子思ふ二上山の鳥曇  
安永圭子

夫留守の卓の浮足花菜漬

鮎子に恙なしとの追而書

庭口に水の道あり野芹摘む

うやうやしむず挽椀に浅蜷汁

何も置かぬ机の上の虚予忌かな  
椿光代

はなびらの降り積む象の背中かな

花筏 天神橋 から 天満橋

病める子に吹いて大きなしやばん玉

海へ沿ふ鬼太郎電車葱坊主

山門に掛けし草鞋や涅槃吹く  
下山田美江

隠れ里一木大樹の花ミモザ

トラツクをひとりの走者鳥曇

永き日の土器を乾す益子かな  
白木蓮に益子の陶芸美術館

少年が抱へて通る蝌蚪の壺  
柴田久子

山吹や塗り替へられしポンプ井戸

ひかへめに風を捉へて花なづな

囀に池のさざ波笑むごとし

柳絮とぶ三の丸より二の丸へ

保土倉宿 四句  
平田紀美子

日本橋まで九里九丁鳥曇に

旧街道は昔尾根道葱坊主

小学校は梨の花咲く底にあり

一里塚残る街道初つばめ

安曇野の水をリユツクに鳥曇り



◇特別作品(抄)◇

## 遡る

小林 和子

ふらここに三方の山沈めけり  
光陰はのこぎり屋根に春の雪  
城跡の空は天領朴の花  
知り尽くす露路横丁や春の月  
友禅を流せし川や目借時  
その下になずな花咲く花筵  
橋裏の日の斑にかくれ残る鴨  
白鷺に水の折れたる花筏  
躓ける闇に任几るる花疲れ  
遡<sup>のぼ</sup>り来てきのふは遠し花は葉に

# 風土独語／神蔵 器



うやうやしむず挽椀に浅蜷汁

安永 圭子

むず挽椀の「むず」とは椀の内外を一気に挽き上げる手法で、ザックリ感をだしたものだ。木工芸術家の川北良造は、轆轤を使つて削り、漆をかける木工芸で、初めて人間国宝となった巨匠である。「たなごころに吸い付くような柔らかな曲線となめらかな木肌を生む轆轤の技、究極の『ごころ』と『技』が、自然の木の持つ力と美しさに新たな命を与えた」（カタログ）とある。

「うやうやし」は「<sup>うや</sup>礼」を重ねて形容詞化した語で、丁重な上にも丁重にとり扱い礼を尽すことである。浅蜷汁は勿論殻つき、殻には布目状の刻線があり、淡褐色と白色とで種々に美しく彩られている。むず挽椀のザックリした櫻の木目と見事に調和し、自然の中に生きる幸福感にひたる。折から爽やかな晩春から初夏の早朝、人間国宝のむず挽椀に浅蜷汁をいただくことは至福のこと、最高の贅沢であろう。

トラックをひとりの走者鳥曇

下山田美江

陸上競技、おそらくマラソンとか一万メートルなどの長距離選手が、広い競技場か校庭のトラックで、ただひとり黙々と走り続けて練習をしている。ここまでは作者がたまたま見掛けた一風景

の写実である。問題は季語である。

作者がこの句に「鳥曇」の季語をもって来たのがよかつた。実際、北帰行の鳥の群が、その時見られようと見られまいと、その頃に吹く鳥風に乗って帰るといふ暗雲の高空があればよい。トラックをひとり走る走者の孤独感、迷い、苦しみ、そして使命感など、見ているだけの作者にも身に沁みて感じられ、長い道程であるだけに疲労がもたらす誘惑、様々な想念にも負けないように、そして鳥たちが、あの小さな体で無事目的地に着くように。眼前をひとりひたすら走り続ける走者が、いつの日か大観衆の歓声に迎えられ、晴れてゴールのテープを切る日のあらむことを信じて祈っている。

小説の猫に名の無き目借時

小林 和子

この句の小説は夏目漱石の「吾輩は猫である」であろう。「吾輩は猫である」は、冒頭「吾輩は猫である。名前はまだない」にはじまり、苦沙弥先生の家に拾われた猫の一生、人間というこつけないな生きもの、愛と矛盾を無名の猫の眼を通して軽妙洒落な文体で見事に書き上げている。谷川俊太郎の巻末の鑑賞では、一口に言えば「吾輩は猫である」は牛の涎よだのごとき世間話であるところがある。小説にしては筋らしい筋もないが、どこから読んでも楽しい。主人公の猫が恋した二絃琴のお師匠さんのところの三毛子はあつけない最期を遂げて三味の皮を残すが、主人公の猫がビールを飲んで酔っぱらい糞にはまって死ぬという結末のところは吾輩はまだ読んでいないのだ。

# 風土集



## 神蔵器選

雀の子門より家に入りけり 横浜

保田英太郎

労りは言葉にならず雪柳

あどけなく笑ふ教師や苗木市

路地入りし喪服の女柳絮追ふ

村ひとつ埋もれてをり春の山

信玄の産湯の井戸や禁鳥 東京

林いづみ

静寛院和宮靈廟花吹雪

雨樋は一木割り貫き初燕

三月のホームの端に山仰ぐ

行く春の叶はぬ夢の残りたる

くちびるにぶつかつてくるさくらかな 高槻

浅田光代

泣く前の顔のゆがみて春の暮

入学の白きソックス枕上

さへづりや蜂蜜おとすヨーグルト

結願の遍路は遠く海を見て

生涯に一男一女桃の花 さいたま

須藤美智子

浅草に友を案内す遅日かな

箱書の父の字薄る兜出す

桃咲きて些事は忘れてしまひけり

春霞大地の息と思ひけり

柏楨の樹齡千年風光る 横浜

中村洋子

朧夜の北ウイングに待ち合はず

花の宴貫入いりの井戸茶碗

レオナルド・ダ・ヴィンチ展出て蝶遊ぶ

鳶の輪の大きく海へ初ざくら

一日に三度の嗽誓子の忌 川崎

豎山道助

蝶乗せて体重計の針動く

身障者一級我に桜咲く

鳥雲に一人娘は帰国子女

一日にして葉桜となりにけり